

私が考える「環境力」

大場 龍夫 (おおば たつお/株式会社 森のエネルギー研究所 代表取締役)

本賞をいただいたことを感謝いたします。私がいただいたというよりも、私に付いて来てくれた社員がもらえたものと思っています。最初に「環境」との馴れ初めをお伝えいたします。

私は、東京墨田区の小さなメッキ工場で生まれました。お家と工場が一緒になっていました。下町の町工場とはそのようなものです。メッキ業では様々な劇毒物薬品を取扱い、そのため排水処理が難しいのです。私が中学生の時に、排水が下水道基準をオーバーしてテレビで報道されるような事件がありました。公害問題が注目されていた時でもあり、そのころから環境問題を強く意識するようになりました。その後、学生時代には日本は鎖国すべきだと本気で思い、有機農業や自然エネルギーに興味を持ち、田舎での自給自足の生活にあこがれるようになりました。そのため、卒業しても就職もせずに、今でいう「フリーター」のように、アルバイトをしながら分散型エネルギー研究会というNGOの活動をしたり、大きな鎌を持って森林の手入れに行ったりしておりました。

1990年ごろ活動の中で、田舎で鍛冶屋さんでもやるつもりで習った溶接の技能を活かし、木材をガス化して発電する実験を手弁当で始めました。自分であれこれ考えたものを自らの手で作り、木質チップをくべるとなぜか電気ができる不思議に感動いたしました。その他に今では当たり前になっていますが、当時まだ珍しい家庭用太陽光発電機の手作りモジュールを作り、おっかなびつくり系統連系をして売電をしたり、ビオトープの水循環用に揚水風車をドイツから輸入して設置工事をしておりました。いずれも手作りのもの

です。自然の恵みをエネルギーとして最大限に活かしていく魅力と共に、一緒に追求できる仲間がいることにワクワクしておりました。そして、必要なことなのに誰もやろうとしないのなら、まず自分がやるしかないと思ってしまふ私は、なぜか誰も手掛けようと思わない木質エネルギーを、自分が追求するテーマにしようと思いました。

我が国は、森林が3分の2を占めておりますが、手が入らず活用されずに荒れている状態の一方で、かつては世界最大の木材輸入国でもありました。森林は、自然遺産に見られるように手付かずの貴重な自然をそのまま保全することが必要な地域ももちろんあります。

しかし、かつて人が介在して利用した人工的な森林は、もし見放され放置されれば、逆に生態系に悪影響を及ぼします。一方、適切に活用して手入れをすれば、多様な生物を育んでくれますし、水も涵養してくれます。

会社設立当時、木のエネルギー利用に目を向けようという人は見当たらず、誰もやらないなら自分がやるしかないと思い、その使い方を考え、エネルギー利用により木質資源の流通を促したいという思いでやり始めました。まだ誤解されることがありますが、木は燃やすと二酸化炭素を出しますが、成長した分を使えば二酸化炭素は増えない、減ることもないし増えることもない…これがカーボンニュートラルと言われる所以です。しかも、森林資源はエネルギーだけでなく様々なことに利用できますし、地域に広く分布していることから、これを活かすことで地域経済の活性化にもつながります。

森林資源は自然の恵みであり、私たちの会社のミッションは、それを最大限に活かすこ

とであります。自然と人間が離れすぎている今、自然の象徴である森林に感謝し、もう一度つながりを再生する。それが地域を活性化する。そして温暖化を防止しながら、豊かな持続し続ける社会に転換することが私たちのゴールではないかと思っております。これは私たちの世代だけでできる話ではないと正直思います。しかし、当社がスタートした時には、今のような形で森林が見直されることや、再生可能エネルギーが注目されるとは想像もしていませんでした。もっともっと時間の掛かることだと思っておりました。時代はすごいスピードで動いていることが実感できますので、ゴールへの道程は加速されていくことでしょう。

森の恵みを活かすということは、太陽光や風力利用と違って100年単位で考える必要があります。今使える木は実は50年、100年前にお爺さん、ひいお爺さんが手を入れたものです。そして今、木を植えたものが50年後100年後の孫や曾孫に活用してもらうこととなります。そのような長い期間で物事を考える必要があります。通常の経済活動とは違い難しい面があります。けれども、本来の経済活動とはこのような活動をいうのではないのでしょうか。単にその場限りで儲かればよいというビジネスをどんなに無数に集めてみても、未来は開かれるものではないと思います。短期的な利益ばかり追い求めていけば、未来には疲弊しか残らないような気がします。

木の活用の仕方は、さまざまな方法があり、エネルギーはその一つに過ぎません。例えば、柱や板、紙などのほか、まだまだ未開拓のケミカルの分野などの活かし方があります。そういうものを全体として活かしていきつつ、最後のくずの部分エネルギーとして活かすのが本来のやり方だとは思いますが。ただし、ある程度の流通量を確保しないと、費用もかかりますし、産業としての柱を構築することはできません。エネルギー需要に供給してい

く意味は大事だと思います。かつては、我が国はもちろん、人類の主要なエネルギー源でもあったわけですから。

今後、私たちはエネルギーの活用から木材流通全体を増大させ、様々な森林の恵みを活かしたサービス産業を築いていく必要があると考えます。現在行っているバイオマスの需要開拓を発端にして、森の恵みの流通を連鎖させていきつつ、いかに価値の高いものを造り続けていくかが事業の大きな方向性であり、私たちのテーマでもあります。

人間と自然との“共生”という言葉がありますが、お互いがお互いを活かし合う姿を言っているのだと思います。「環境がよくなるためには人間がいなくなればよい…」というような原罪的な思考に陥りがちですが、人間が働くことで環境が豊かになるというのが共生の意味であろうと思います。人間が介在することで自然がより豊かになっていく姿を目指すべきです。人間と自然は対峙しているではありません。活かし合うのです。

最近になって分かりかけてきたことがあります。それは我が国が類稀なる“共生の国”であるということです。人類史上最古の国であるだけでなく、自然を畏怖し、自然に学び、自然の恵みを最大限に活かし、活かされてきた“共生の国”であったということです。世界最古3万年前の磨製石器の出土からも自然を活かして価値を生み出す私たち祖先の挑戦は既に始まっており、その積み重ねの上に私たち現代人も生かされています。1,400年前の人類最古の憲法である聖徳太子十七条憲法第一条には「和を以って貴しと為し…」とあります。和を以って共生する伝統の精神は、太古の時代より、人も自然も、全てのものを対等に認識し、敬い活かす基本が既に示されていると感じます。私たちの仕事も為すべきことも、時代を超えた繋がりの中にあるのだと認識していきたいと思っております。